

はじめに ^{しもつみち} 下ツ道は、^{かみつみち} 上ツ道、^{なかみつみち} 中ツ道とあわせて奈良盆地を南北に縦断する古代の幹線道路です。岸^{としお}俊男氏（元・榎考研所長）の研究では、藤原京と平城京の造営基準になったとされています。下ツ道は基幹の交通だけでなく、奈良盆地の土地開発計画基準線でもありました。古代の条里制では下ツ道を境に路東と路西とに分けられています。調査地は旧^{そえかみ}添上・^{そえしも}添下郡の郡界であり、その名残りとして天理市と大和郡山市の市境になっています。

下ツ道が文献に最初に登場するのは『日本書紀』天武天皇元年（672）の壬申の乱の記事です。朱雀^{すざく}大路の調査（奈良市）、^{ひえだ}稗田遺跡（大和郡山市）、^{はちじょう}八条遺跡（天理市・大和郡山市）などで下ツ道の東西両側溝が確認されており、断片的ですがその規模が明らかになってきました。

調査成果 今回の調査地は、天理市南六条町と大和郡山市八条町に所在し、平城京羅城門から南へ約4.6 km、藤原京（10条10坊）^{きたきょうごく}北京極から北へ約10 kmに位置します。下ツ道とその周辺を南北183mにわたって調査したところ、下ツ道と東西溝、南北溝などが見つかりました。平安時代に起こった洪水のために下ツ道の路面は残っていませんでしたが、東西両側溝を確認できました。

東側溝は幅7～11m、深さ1.4～2mの大きな溝です。溝の底は南側が北に比べて約10 cm高い程度で、水の流れは緩やかだったようです。東側溝の北端で東西に並ぶ杭列は、その南側に東西溝が取り付くことから水位調節のための施設と考えられます。また、東方から流入する水の流れを制御するために東側溝を大きくする必要があったと考えられます。東側溝からは大量の奈良時代の土器や瓦とともに、^{わどうかいほう}和同開珎やウマ・ウシの骨などが出土しました。広い範囲から出土したウマ・ウシの骨は、現時点では祭祀にともなうのか、捨てられたのかはわかりません。

西側溝と考えられる溝は3条あります（西側溝1～3）。いずれも幅1.2～1.8m、深さ0.2～0.5 mと東側溝に比べて小規模で、常に水が流れていたのではなかったようです。西側溝1と2の新旧は不明です。西側溝3は、西側溝1・2とほぼ同時期に埋まった東西溝を掘りこんでおり、3条のなかで一番新しい溝です。西側溝からは土器や瓦がごく少量出土しました。西側溝2の出土遺物は東側溝とほぼ同時期です。

まとめ これまでの調査から、下ツ道両側溝の中心から中心までの距離（^{しんしんかんきより}心心間距離）は約23mであることが判っています。今回の調査では、東側溝と西側溝1～3の心心間距離は、それぞれ約26m、約23m、約19.5mとなりました。これまでに判っている下ツ道の規模に対応するのは、東側溝と西側溝2の組合せで、路面幅は約19mに復元できます。下ツ道の東側溝が掘られたのは8世紀初めで、9世紀のなかで埋まっています。10世紀になると、埋まった東側溝の上に水田が営まれるようになります。その後、道路幅を縮小した下ツ道は現在も生活道路（市道県道線）として使用され続けています。

天理市・大和郡山市
下ツ道（八条北遺跡）
発掘調査現地説明会資料



イワミン
奈良県立橿原考古学研究所
マスコットキャラクター

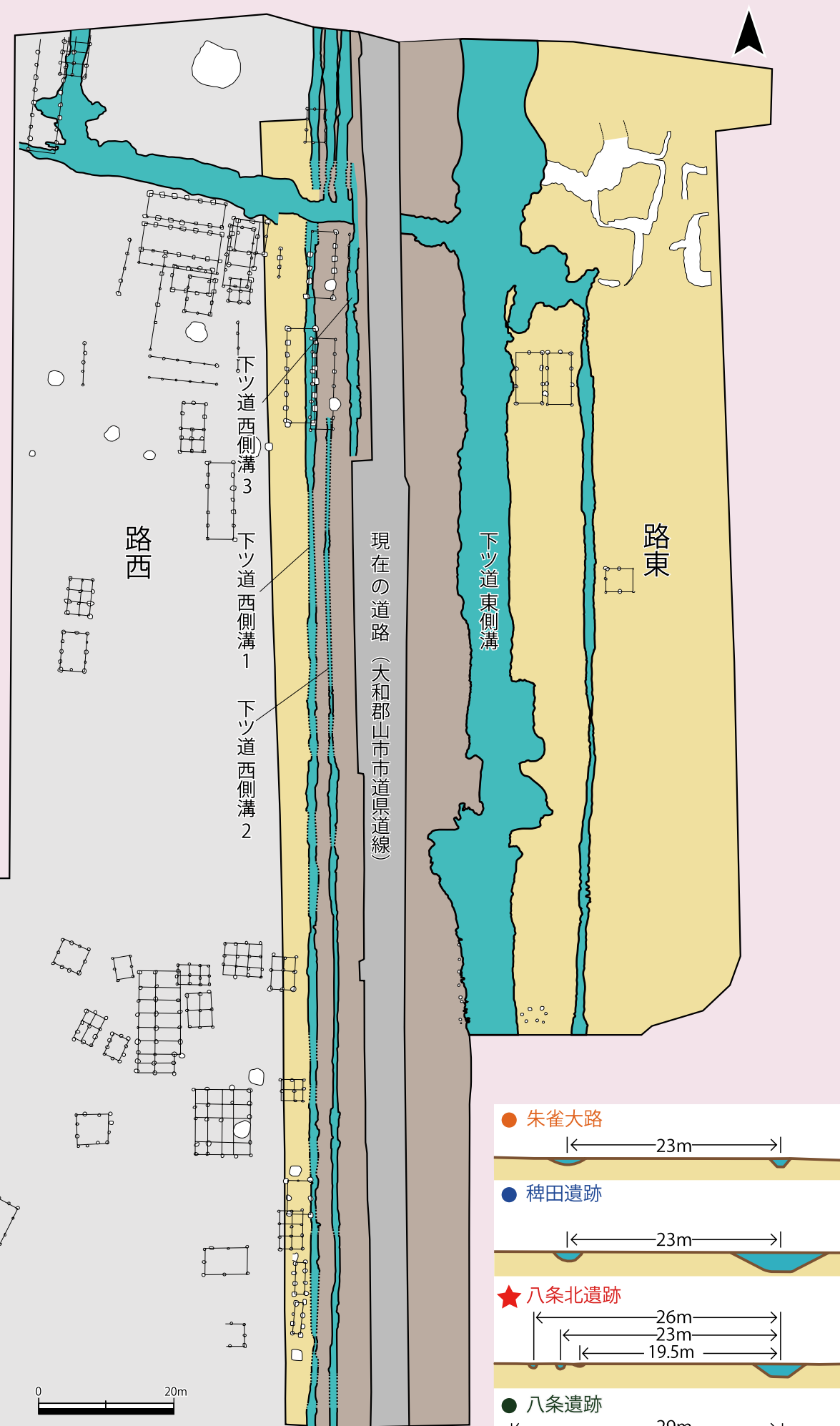
2011年12月18日
奈良県立橿原考古学研究所
〒634-0065 奈良県橿原市畝傍町1番地
電話：0744-24-1101（代表）
<http://www.kashikoken.jp>



天理市南六条町
大和郡山市八条町

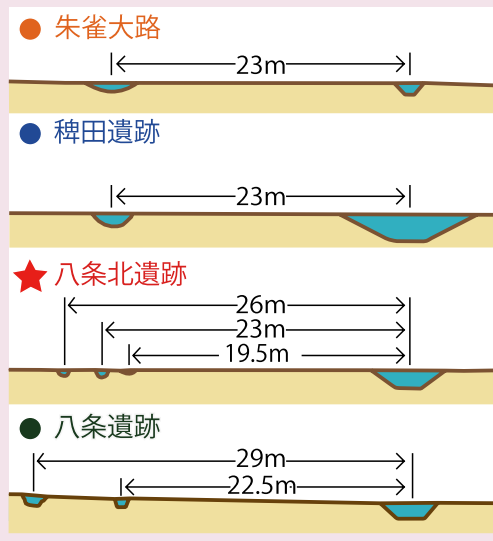
下ツ道（八条北遺跡）

2011年12月18日
奈良県立橿原考古学研究所



今回の調査区 (S=1/800)

- 今回の調査区
- 下ツ道路路面
- 2002・2003年の調査区



下ツ道断面模式図



調査区位置図 「国土地理院発行1/25,000地形図(大和郡山)を使用」



古代の道路と藤原京・平城京の位置



東側溝から見つかった杭



東側溝から見つかった杭と動物骨



東側溝から見つかったウマの骨